# 町長室からこんにちは

No.14

一宮町長
馬淵 昌也

夏になりました。夏は、花火・灯篭流し・地引網など、町の観光行事が目白押しの季節です。特にこの時期は、一宮の夏の顔ともいうべき海水浴場が開設される、大事な時期でもあります。

海水浴といえば、先般（7月13日）、千葉テレビの報道で、ショッキングなニュースを目にしました。日本財団の調査で、15歳から69歳まで、1万1600人を対象に、海についての意識をたずねたところ、30・7％が「海に親しみを感じない」、41・5％が「海に入るのが嫌い」と答えたのだそうです。そして、最近5年間で海水浴に行った人は、11・4％、10人に1人だということです。深刻な「海離れ」の状態です。同報道では、千葉県の海水浴客数の変化についても報告しており、1971年に県内を訪れた海水浴客は1344万人だったのに、昨年は152万1000人、実に約11％まで落ち込んでいるということです。

海水浴客数の減少は、海岸侵食による砂浜の後退、それに伴う海水浴場の閉鎖ということも関わっているでしょう。一宮でも、東浪見・新浜の海水浴場はなくなってしまいました。一宮海岸も、かつては広大な砂浜を渚まで歩いてゆくのが、特に夏は熱くて大変だったとよくいわれますが、近年は砂浜が細ってしまって、駐車場からただちに渚という状態になってしまいました。

日本財団の分析によると、こうした「海離れ」の事態が生じたのは、人びとが幼少期から海に親しむ機会が減っていることにあるといいます。海岸の後退と海水浴場の減少は、そうした事態に拍車をかける要因になっているのでしょう。結果として、「海はべたべたするからイヤ」「海はくさいからイヤ」などということになってしまうと、人びとの心を再度海に振り向かせるのは、容易でないと思います。

私たちの町の海岸では、今、サーフィンが盛んに行われています。しかし、実際には、20代以下のサーファーは、いくらもいないのだそうです。日本人全体の「海離れ」が上記のように深刻であるとすると、「オリンピックのサーフィン競技が開催されるから、一宮の海はサーフィンで未来永劫安泰だ」、というわけでもなさそうです。一宮町では、海水浴・サーフィンともに、今後も末永く続かせるため、戦略的に「海に親しむ」ことの楽しさ、有意義さを宣伝してゆくことが必要になってきている、と思います。